

垓下の歌（項籍）

力^{ちから} 山^{やま}を 拔^ぬき 氣^き 世^よを 蓋^{おほ}う

時^{とき} 利^り あらずして 騅^{すい} 逝^ゆかず

騅^{すい} 逝^ゆかざるを 奈何^{いかん} せん

虞^ぐや 虞^ぐや 若^{なんじ}を 奈何^{いかん} せん

力拔山兮氣蓋世 時不利兮騅不逝
騅不逝兮可奈何 虞兮虞兮奈若何

解説 この詩は、垓下で項羽が劉邦の漢軍に囲まれ、夜、漢軍の兵士たちが、四方で楚の国の歌をうたうのを聞いて、自分の根拠地である楚は占領されてしまったと思ひ、虞美人を相手に最後の酒宴を開いて悲歌杭慨し歌ったもの。

語釈 ※垓下Ⅱ安徽省靈璧県の東南にある地名。※兮Ⅱ助字。

※蓋世Ⅱ天下をおおい尽くす。※時不利Ⅱ時は時運。※騅Ⅱ項籍の愛馬の名。一日に千里も走ったという。騅とは蒼白雜毛の馬。あし毛。

ここでは馬の名となっている。※虞Ⅱ項籍の愛妾の名。

通釈 わが力は山をも引き抜き、わが意気は下をおおい尽くすほどであった。ところが時運は自分に利することなく、垓下の戦いに敗れ愛馬の騅も走り進もうとしない。この騅の走らないのを、いったいどうしたらよいであろうか。虞よ、虞よ、最愛のお前をどうしよう。今の自分はお前をどうすることも出来ない。